

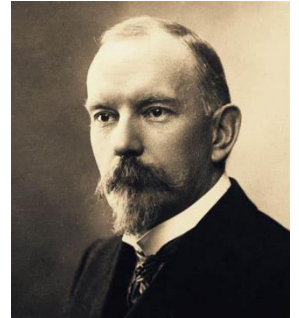


ちよつとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



私も人間でありながら、その人間が私を人間嫌いにする。…… ジュール・ルナール

ルナールと言えば、「にんじん」と「博物誌」が真っ先に思い浮かびます。後者は洗練された一行詩がどこまでも美しく、文句のつけようがないほど気品に満ちています。気になるのは前者の方でしょう。私は小学生時代に読んで、途中で気持ちが悪くなって読むのを投げ出したのを覚えています。とても簡潔な文章で読みやすいのですが、登場人物たちのことを全く理解できなかったのでしょう。それ以来、読み返していないのでエンディングがどうなのか知りません。ただ、最近は、DVやネグレクトを始め、家庭内の虐待が大きく問題視されてきているので、改めて読み直してみる価値はあるのかもしれません。



但し、冒頭句に引用したのは「にんじん」ではありません。「エロアの控え帳」の中の「榛（はしばみ）のうつろの実」の章に出てくる言葉です。「エロアの控え帳」は一般的には有名ではありませんが、とても不思議な作品で、明確な筋立ても統一性也没有。しかし、この言葉に代表されるような皮肉な人間描写は一貫しています。

この言葉は、人間に深く関わろうとするからこそ人間嫌いになるというジレンマを言い表したものです。少し分かりづらいかもしれないので、解説をしたいと思います。

仕事や教育の場において、誰かに対して期待することでその人のスキルを伸ばす「ピグマリオン効果」は、完全に市民権を得た言葉になっていると言っても良いでしょう。しかし、期待というものはいつも自分の思っている通りにはならないもので、期待が外れてがっかりしたり、期待外れになったことで「裏切られた！」とショックを受けたりすることも多々あるものです。

こういったトラブルを何度も重ねていく内に、他人に期待をかけるなんてアホらしい。どうせ期待なんかかけてもその通りにはならない。期待が原因でお互い傷付くぐらいなら、最初から期待しない方がマシだ。などと考えて、他人に対して期待しない習慣を身に付けるということは誰でも1度や2度は経験があるのではないのでしょうか。中にはそれが高じて人間嫌いになってしまうという人もいます。

以上が、私なりの冒頭句の解釈です。

これに対応するためには、他人に全く期待しなければ良い訳で、当然期待が外れてがっかりする事もなくなるのでストレスは減ることになります。その反面、他人に期待していないという態度のせいで周囲と距離感ができてしまったり、相手から心を開いてもらえなくなったりすることも当然考えられます。どちら寄りに生きるかは本人の選択であり、さじ加減一つであるということになります。

恐縮ながら、私の場合はどちらか一方に偏るということはありません。が、基本的な生き方としては可能な限り他人に寄りかからないようにと心掛けてはいます。したがって、自分に必要なことは自分一人で完結させようとするタイプです。例えば、仕事上のことで言えば、誰かが上手なスキルを教授してくれるだろうとか、待っていれば誰かが仕事を具体化してくれるだろうとか、そういう期待を抱いてのんびり待ちの姿勢でいるということは好みません。むしろ自分から次々に仕事を創り出してしまいます。このことは、他人に期待しないが故に、こういった自主性が育ったと言えるのかもしれません。それは大きな利点と言えるでしょうが、その一方で、休まることもないという短所も抱えることとなります。

（終）